更にはその精神を抽出して反映させた作品は、いつの時代にも少なからず存在している。

これまでの様々な時代の作曲家達が民族音楽に着目した背景、理由は個人の信条、流行、時代の要望等に応じて多種多様であると思われるが、時代が変われど音楽の中に息づく自然な「呼吸」を求めたくなる、裏を返せば、何か「息苦しさ」を痛感する環境に迫られた時に、「生命」の原点に立ち戻ろうとした共通の結果なのではないかと考えられる。

現代の「便利さ」の蔓延によってつい意識が翳みがちになる人間の、そして自然の持つ「生命」の賛歌を今こそ謳いあげるべきなのではないか。

（あさか・みつる：本会　作曲部会員）

訃報　**諸井誠（作曲家）**

作曲家の諸井誠（もろい　まこと：1930年12月17日生）が9月2日午前3時36分、間質性肺炎にて逝去した。家系は秩父セメント（現太平洋セメント）創業者一族であり、我が国の戦前戦中における代表的な作曲家であった諸井三郎の次男として生まれる。17才時より作曲を池内友次朗に師事し、1952年3月東京音楽学校本科（現・東京芸術大学音楽学部）作曲科を卒業。黛敏郎、入野義朗、柴田南雄等とともに20世紀音楽研究所を組織して、軽井沢を中心に移動音楽祭を開催する。12音音楽、電子音楽など新しい作曲技法を採り入れ、前衛音楽の旗手との評価を受けたこともあった。電子音楽作品としては、1956年NHK電子スタジオで制作された「7つのヴァリエーション（黛敏郎との共作）」があるが、この作品は、作曲家別宮貞雄との間で論争を巻き起こした。1960年代に入ると尺八を中心に邦楽器による作品も手がけ、尺八現代本曲《松籟五章》（1964年）などを作曲する。

1985年には「日本アルバン・ベルク協会」を設立し、初代会長となる。1994年には彩の国さいたま芸術劇場初代館長に就任し、1997年4月に芸術総監督に就任。1999年4月には、理事長を知事より禅譲される。しかし2005年にはすべての公職を辞し、鎌倉に移住し、創作活動主体の生活を続けていた。

なお、相応しい執筆者を捜し、改めて来月号に追悼記事を掲載する予定である、

（本誌編集長）

「音楽の世界」誌 2013年10月号（日本音楽舞踊会議刊）

『特集：21世紀音楽の潮流は？（3）』

２１世紀の今、音楽の本道に則った作曲を！

作曲：ロクリアン正岡

現在の作曲にも役立つ歴史上の所与への感謝

ほかの方々も同じだろうが、気が付いたらこの世に－もちろん人間としてだが－放り出されていて、そこには音楽があった。そしてまた、多くの音楽家や音楽ファンの方々は、音楽を意識する前に自分の中に音楽が入り込んでいた、というところではないか。で、そのような環境は音楽がともかく外在し、そしてそれらは人の声ばかりでなく諸々の楽器とか、はたまた音階、和音、そのほか諸々の素材に支えられていることは間違いなく、私も作曲家の端くれなのだから、まずはそのことに対する感謝の念を示しておきたい。

この点、我々の直近の先行者、２０世紀の作曲家たちも同じだろうし、１９世紀、１８世紀、と遡れば切りなく、いつの時代の音楽家の卵それぞれが、それまでに用意された音楽のソフト、ハードの両方にまたがる諸状況に支えられて育ちゆき、また後代を支えても来たのであるし、今後もまたこのことに変わりあるまい。

まず、現代音楽の歴史を語るうえで、それを丸ごとしっかり支えている三つの要素を確認しておきたい。

ピタゴラスによる音律の確定、グレゴリオ聖歌による教会旋法の確立、ヨハン・セバスチャン・バッハによる平均律と総合的作曲技法の確立がそれだが、その後、ほぼ２０世紀初頭より音楽の根底を人工的に忙しく弄りまくった後に位置する我々はテクノロジーの発展に影響される音楽文化の渦中にある、と言えよう。ここで、次のようなクレームをもつ方がおられるかもしれない。なぜ、最初の断りとして、このような「先祖様は遡れば遡るほど偉い。ピテカントロプス万歳！」みたいな事を言うのか？人間の聴覚や発声機能はどこからきたか？それがなかったら、土台、音楽はあり得ず、楽器だの楽曲だのへったくれもなかろう。音楽存在の大前提はこっちの方だ、と。ここでは「どうか最後まで読んで」としか申しようがない。

素材の狭さへの足掻きに端を発した現代音楽への逸脱
２０世紀に起きた現代音楽の勃発の責任をバッハに問う

調性を拘束と受け止めそこからの脱却に自由がある、として無調という基盤を考え出したシェーンベルク達の現代音楽への短絡的移行を速めた大きな原因の一つにグレゴリオ聖歌におけるロクリア旋法排除がある。さらに、当初あった残るいくつもの教会旋法が何百年もの時間をかけて長調、短調の二つへ収斂されて行った。彼らの音楽的欲求は次第に自覚されるところとなり、それは調性の確立と転調の自在さであった。まず、ドミナントとトニカ両機能の相互強化、それによって各調の自己同一性と自他の相互峻別がはっきりし、転調への志向がいやが上にも刺激された。それを可能にするべく基盤整理したのが平均律である。しかし、主音がどうであれ。第七音の主な役割がドミナントにおける導音と限定されることにより、第七音がこ

うむった自由の喪失をどうしてくれよう。人は、ドミナントの中核たる導音の働きで主音が主音たりえ、明確な調性感というものの安泰が約束される、そしてそれぞれの調性のテリトリーがはっきりするとともに調から調へと渡り歩くことも可能になったと、バッハ先生と一緒に喜ぶ。いつのまにやら本来の教会旋法は、イオニアン、エオリアンも含めて消されてしまったが、生き残って特殊な役割を負わされたものこそ、現在の調性の第七音、相対音程「シ」なのである。自由を剥奪され苦しい思いをさせられたのは「シ」音であるが、またシェーンベルクでもあった。

もしもだが、すべての（整理すれば）７つの旋法を生かしつつ、転旋の自由を温存しつつなお折角ほかに五つも音があるのだから転調の自由も加味することで、円運動、螺旋的昇降運動を続けておれば、グレゴリオ聖歌制定からたった千年ちょっとぐらいで拘束感を覚えそこからの脱出を求める作曲家など現れようもなかったのではないか？

ここで私は、ネット上のかの吉松隆氏の 20 世紀における「現代音楽でない音楽」の系譜という記事に遭遇した。彼は言う。「シェーンベルクに端を発した調性という拘束からの自由も、また新たな不自由を産む運命にあった」と。

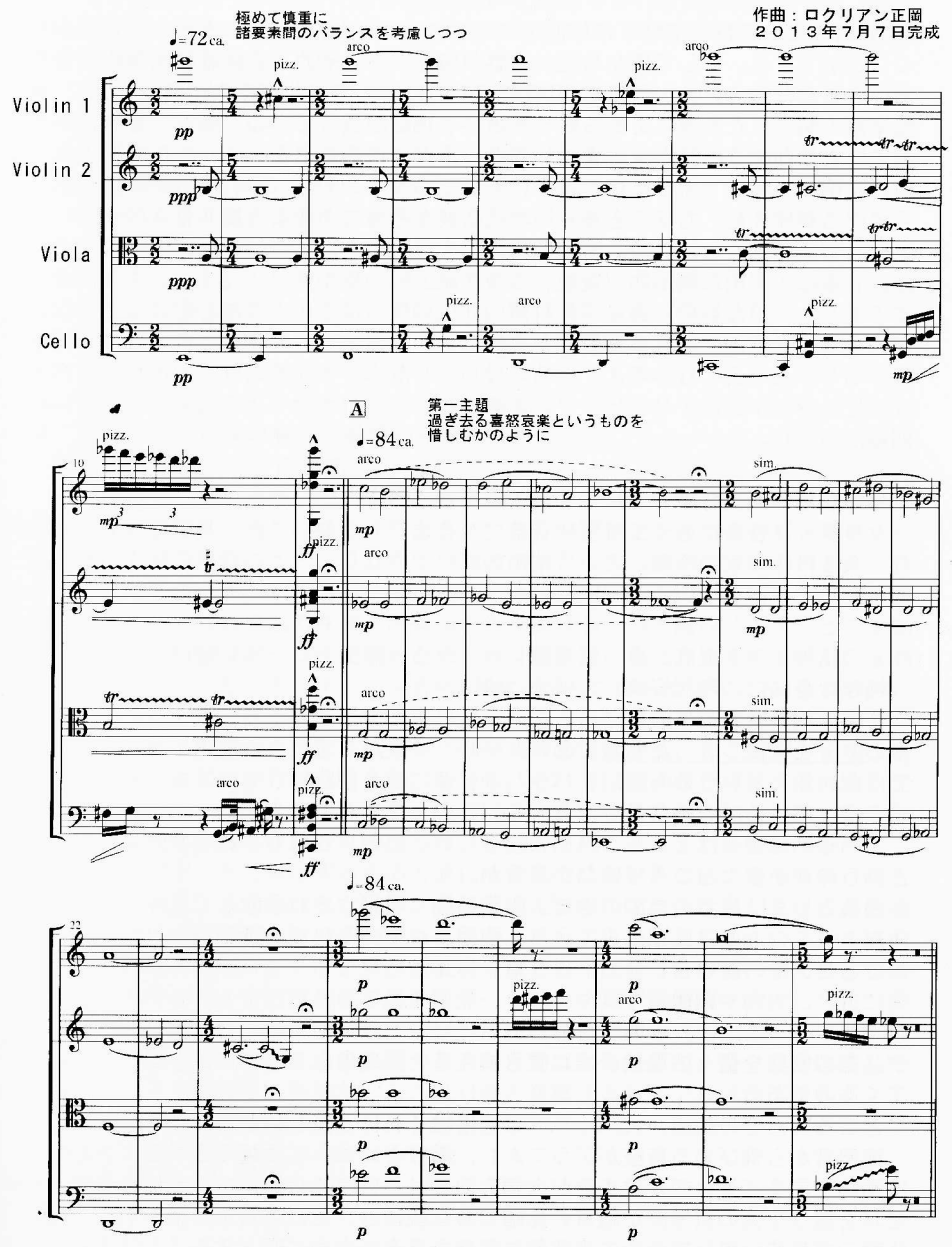
・・・メロディを歌ってはいけない・・・協和音やハーモニーなどもってのほか・・・感覚（聴いて心地よい）より知性（論理的であること）を優先するべきである・・・芸術なのだから、大衆に受けたりしてはいけない・・・新しいこと、人のやっていないことをするべきである

時間超越的能を有する私の場合

これらのことは若いころの私にとっても言葉としては聞こえてはいたが「馬の耳に念仏」でしかなかった。そして現在の私を見ればわかるが、シェーンベルク世代の作曲家の立場に置かれていたとしても、無調などには走らず、全音階の十全な機能回復、ということを開始していただろう。そうすれば新たな地平を開きつつも音楽の懐かしさを失わないという、二律背反的な理想を実現できたのではなかろうか。やはりロクリアンあるいは７rian（日本人であったならばナナリアン。いずれにしても、これは全音階の意味である）を名乗っていたかもしれない。しかしそれとて、無調とか１２音とかの誰の目にも明らかな素材入れ替え行為などではない。もっと遥かにひそやかで遠慮がちで、それでいて芯の強い大和撫子的行為であったろう。しかし得るものははるかに大きく、失うものはほとんどなかった筈だ（その一例として、次ページ掲載の楽譜をご覧ください）。

バッハと佐村河内守共通の光と影、功績と犯罪

これは、やれ調性だ、やれ無調だ、やれドリアンだロクリアンだなどの細かい話ではない。現代でも全作曲家が直接間接に世話になっている大先生、バッハを問題にするのでなければ、私の感情（＝喜怒哀楽）は治まらず、明鏡止水の心境には至り得ない。



-1-

御両人とも楽器を使わずに作曲をすることができた。音楽的な楽想を頭に思い描くことができる。そして確かな絶対音感があるから、それらを正確に楽譜化できるということだ。バッハの言葉に、鍵盤楽器の前に佇んで作曲する作曲家のことを「鍵盤楽器の騎士」とか言ってからかったという逸話が残っている。楽器で音を確かめなくても作曲できる作曲家は多くいるだろうが、そのことをバッハや佐村河内ほど信念を持って行動で示した例がほかにあるだろうか。バッハの音楽は抽象性が高い。高すぎるがゆえに、ちょうど多くの現代音楽がそうであるように非音楽的かというと決してそんなことはない。音楽的魅力も十分である。しかし音楽的魅力の向こうに、見事な人工的な構築物（後述、ガラス細工）の影が透けて見えるのを私はどうすることも出来ないのである（佐村河内守氏の場合はそのような心配には至らないが、全聾でも世間に通じる交響曲が書けるという事実が、「作曲に健康な外耳は不要かも？」との良くない考え、あるいは可笑しなムードを漂わせている点は、パラリンピックファンにオリンピックの素晴らしさを忘れさせるようなもので、大いに問題がある）。

音楽の現場は鑑賞体験の方にあるのではなかろうか？

クラシック音楽にあっては現代音楽に至るまでもう長いこと、音楽は作曲に始まり、楽曲は作曲家の所産、という暗黙の前提が成立し、人々の音楽に関する無意識的思考まで制御しているのではないか（それもバッハによってもたらされたとすればまことに恐ろしい話だ）。そして、この前提が今後も作曲界において支配的で作曲家の精神や手を根底から－無意識レベルから－コントロールし続けるとなると、「純粋な意味での現代音楽」の将来は暗い。

音楽の現場は鑑賞体験にある、という私の考え方からすると、バッハの仕事は音楽の半分を無視しきったものであり、一時、一般から忘れられたのも身から出た錆ではないか。というのも、いまバッハの音楽に聴き惚れ続けていても、常に退屈を感じ続けている一方の自分が存在する、ということがあるのだ。

「バッハの音楽はどれもこれも素晴らしい。だが、どれもこれも我慢を伴う。」というのが正直なところではなかろうか。

お薬といえば患者のための物だ。お薬の働く現場はそれを飲んで以降のその人の体だ。「このお薬は良く出来ている。使用されている材料も選び抜かれた高価なものであり、その組み合わせも、ミクロレベルから見てもマクロレベルから見ても完璧に近い。実物や顕微鏡写真や、成分一覧票を見ているだけでも、その美しさにほれぼれしてしまう。」という言辞が完全にピント狂いであることは誰でもわかろうが、このお薬を個々の現代音楽に置き換えると、皮肉なことにピントはかなりあってくるのである。

ところで、その源流、大バッハへの適用はそれほど難しいだろうか？

演奏者から飛び来る音波がどうであれ、鑑賞者において生起する「現実の音楽」は別物である。そしてそれこそが大切なのではないだろうか。たしかに空気を震わせ耳を襲う空気の粗密波が鑑賞の発端であり続ける、とは言えよう。しかし、鑑賞体験のすべて、ましてやその本質的な部分を演奏や楽曲に還元することは出来はしない。飲んで得られた健康や、逆に体調の悪化等々が、丸薬や毒饅頭のどこを探せば入っているというのか。バッハの曲を聴いて素晴らしい鑑賞体験を持った、音楽の素晴らしさを知った、という人々は無数におられる。だがそれは、決して彼がお薬を患者のために調合したからではないのだ。

「自分自身、曲を聴くすべての人々と同じく神の被造物であり、内的な神の心に叶う音楽を作るだけのこと」というバッハの声が聞こえてくるようだ。

ならば、バッハのような生き方をしている限り、神忘れ、神殺しの２０世紀以降の現代音楽に将来はないと考えるのが正しくはなかろうか？！？「神への信仰の傍ら、個々の人間の鑑賞体験への慮りを持たないバッハと反対に「神を無視しつつ、個々の人間の鑑賞体験への愛」に徹し、鑑賞者のタイプ別、ジャンル別に特化した楽曲つくりに励む、というのが、現代音楽の跡を継ぐ者の正当な道なのかもしれない（丸薬品評会は消滅）。しかしそれでも、世の商業主義（消費文化）と共謀し、甘い水に集まるホタルの如き大勢の人々に数多くの音楽をとっかえひっかえ与え続けるよりは数等マシではなかろうか？

私、ロクリアン正岡の場合、理想的音楽を求めて

誌面が残り少ないので詳細は語れない。

１）私は、自分の内から出て来るもののみを扱うが、それを外耳でもって聴いてはより良いものへと磨いてゆく。声と耳、つまり発信側と受信側の分裂を解消させてくれる音以外は残らないようにする。両者が納得しあう瞬間に、神の声と耳の合致が感じられる。音楽の中に神の心が立ち現れる。その神とは人々の音楽受容性（音楽鑑賞時）においても強いリーダーシップを発揮するだろう。

２）私にも楽曲実現、音楽実現のための様々な素材は現に与えられている。

ロクリアンを含むナナリアン＝全音階、各オクターブの平均律１２音、全音音階、グリッサンドの音、はたまたピアノやらフルートやら弦楽四重奏やらオーケストラやら、そうそう五線やオタマジャクシやら楽典の諸規則やら、この私だって知っているし使っているという感覚はある。しかし、それらは鏡のガラス材や設計図や工具の類のものであって、音楽の表象×内容は、そこに映る映像の如きもの。どう、ガラス材を上手に組み合わせ見事なガラス細工が出来たとしても、鏡映現象が生じなければ、カタカタと音はするものの真正な音楽では有りえない。ガラス材は鏡となって自らを隠しきらねばならない。手段は消え去らねばならない。さらに、極論になるが個々の音楽のもとに演奏者も作曲者も消え去らねばならない。「我を忘れて音楽に聴き惚れる。」そうそう、鑑賞者も自分自身なんてものも、消え去らねばならない。そして、ただ忘我あるのみ。

３）なお、同じ自分の作品でも、個々の作品は別物であるべきだ。
作曲という営為は、なにも自分の顔つくりなどではないはずだ。自分自身は商品ではない。作曲家の個性、作風などなどは自然と発露するものでなければならず、でっち上げるものではない。
例をあげるのが一番だろう。
弦楽四重奏第２番の冒頭（詳しくは、本号掲載の「様々な音の風景Ｘ」用プログラムの拙文をご覧ください。ＨＰには更なる詳細あり）。

（ろくりあん・まさおか：本会作曲部会会員）

「音楽の世界」誌 2013年12月より

《読者のページ》

投稿　ロクリアン正岡の10月号特集記事を読んで

経営学者　嘉味田朝功

「２１世紀音楽の潮流は？」という特集記事に接した時、４０年前の石油危機発生時の記憶が蘇った。産油国が国際資本に対抗して、新しい機構（オペック）を創設し、中東戦争の勃発を機に、生産制限による石油価格の急騰が起こり、資源輸入依存の日本経済の根幹が揺るがされた。「海図なき航海」の時代の行方を探るべく、通産省（当時）は、ジャーナリスト、芸術家、学者の３グループ、それぞれ５人からなる１年がかりの研究会を立ち上げた。私が属したのは、脳生理学、精神医学、文化人類学、社会心理学、経営行動学の学者グループであった。研究会では、一つの時代が終わったことは確認できたが、新しい時代の具体的な方向性は示せなかった。

一方、アメリカの社会学者・ジャーナリストのアルビン・トフラーは、３０年をかけて、世界各国の政治・経済・社会・文化の各領域における現場の取材活動を実行し、その結果を１０年毎にまとめ、変化の潮流を３冊の書物に表し、世界へ向けて情報発信した。書名は１９７０年発刊の「未来の衝撃」に始まり、80年の「第三の波」、90年の「パワーシフト」である。「人類は今、農耕社会から工業社会を経て、情報（知識）社会へと、『進化』の道を辿りつつある」という結論であった。２１世紀の今、そこに記された事象の多くは適中している。そして人類社会は、３つの共通課題に直面している。グローバル化、ＩＴ化、エコ化である。こうした状況を踏まえて、学問の世界では各方面にわたって、知の組換え作業が進行中である。

さて、こうした人類史的な文脈に照らして「２１世紀の今、音楽の本質に則った作曲を！」という作曲家ＬＭの記事を読んで、興味深い点が多々あった。まず、彼の問題意識「２０世紀に起きた現代音楽の勃発の責任をバッハに問い、バッハの仕事は音楽の半分を無視しきったものである」との言明は、音楽文化や技術、歴史などに疎い私にとって、興味深く、かつ啓蒙的であった。次に、全体の論旨の展開は、鋭い感性と正当な論理に支えられていて、異分野の専門家とも思想、価値観を共有できる類のものであった。結論部分では、新しい時代を切り開こうとする個性的な夢と強い覚悟のほどが伝わってきて、共感を覚えた。その内容は、賢明で（知）、逞しく（情）、善良な（意）ものに映った。

会と会員の情報

ＣＭＤＪ　会と会員のスケジュール

12　月

1日(日)作曲：橘川琢　詩と音楽を歌い奏でるトロッタの会18
BiotopeⅢ≪庭園幻想～祈りの歌≫室内アンサンブルと花による(改訂初演)op.49ｂ【早稲田奉仕園スコット18；00～当日3,500円】

2日(月) 並木桂子（Pf.）共演：岸洋子（Pf.）印田千裕（Vn.）松葉春樹（Vc.）関森温子(Sop.)アレンスキーの肖像Vol.1　２台ピアノの為の組曲 第1、2番、ピアノトリオ第1番、歌曲　【杉並公会堂（小）19：00　3,500円（小学生、学生割引有り）お問合せ：080-3003-2102　アラベスク】

6日(金) 深沢亮子とその仲間による“ピアノとヴァイオリンとチェロの夕べ”
出演：深沢亮子(Pf.)恵藤久美子(Vn.)安田謙一郎(Vc.)
【音楽の友ホール 19:00開演　全自由席　4,500円（会員割引あり）】
※詳細は今月号掲載プログラム参照

7日(土)日本音楽舞踊会議　理事会【19:00～21:00 事務所】

8日(日)栗栖麻衣子(Pf.)他出演 ぴあの×ぴあの～２台ピアノによるコンサートリスト：交響詩前奏曲、ラフマニノフ：組曲第２番、ブラームス：ハイドンの主題によるヴァリエーション、２台８手、２台１２手作品他
【熊谷文化創造館さくらめいと太陽のホール一般2000円/高校生以下1500円問合せ:事務局 080-3310-4238　日本音楽舞踊会議後援事業】

7・8日(土・日)第38回全国尺八コンクール　主催公益社団法人日本尺八連盟
審査委員長坂田誠山・審査委員高橋雅光他４名
【京都市男女共同参画センターホール（ウィングス京都ホール）】

19日(木)ピアノ部会総会【新宿タカノ５階集合　11:00～】

19日(木)ピアノ部会主催　ベートーヴェン＝ヴァイオリンソナタ第１番ソナタ
レクチャー　講師:北川暁子　ヴァイオリン:北川靖子　受講者:2楽章 北村真紀子
【北川靖子スタジオ(野方)18:00～20:00　有料 】
1･3楽章受講者募集中:問い合わせ 戸引(03-3381-6691･090-2255-6181)

20日(金)【月刊「音楽の世界」編集会議【19:00～ 事務所】

21日(土) 大矢絢子（Pf.）ピアノリサイタル　シューベルト　ピアノソナタ第21番 変ロ長調 D.960　他【Hakuju Hall 13：00開演 3,500円　お問合わせ：新演奏家協会03-3561-5012】

23日(月・祝)廣瀬史佳（Pf.)企画　－東日本大震災復興支援チャリティーコンサート池上英樹超絶技巧のマリンバと打楽器VOL.2　チャールダーシュ・チゴイネルワイゼン他【山梨県笛吹市スコレーセンター集会室　一般2,000円、高校生以下1,000円※入場収入の全額が寄付されます。
問い合わせスコレーセンター055-263-7959】